

山科本願寺南殿跡 地元向け現地説明会 資料

2016.05.28

所在地：山科区音羽伊勢宿町 32 番 22

調査主体：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査面積：約 70㎡

調査期間：2016 年 5 月 9 日～ 31 日

調査要因：個人住宅建築にともなう発掘調査（文化庁国庫補助事業）

はじめに

山科本願寺南殿は、延徳元年（1489）に造営された蓮如上人の隠居所です。山科本願寺は現在の山科区西野の周辺に、文明 10 年（1478）から 15 年（1483）にかけて造営され、繁栄を極めました。天文元年（1532）、法華宗などの連合軍との戦いで焼亡しました。史料によればその戦火によって南殿も焼亡しますが、天文 5 年（1536）に泉水山光称寺がその故地に建立されました。現在の真宗大谷派光照寺境内の南側には、苑池や築山などが良好な状態で残っています。

山科本願寺南殿跡内では、2001 年にはじめて発掘調査が行われ、現存する土塁の延長や堀、東西方向の土塁などが確認されました。その後南殿跡内では 3 度の調査が行われ、今回は 5 度目の調査になります。

調査成果

本調査では、南殿内郭を囲む土塁と堀を確認しました。山科本願寺南殿は二重の土塁で囲まれていたと推定されています。調査地は、内郭土塁の復元図上で北西角にあたっており、今回その推定地で土塁の痕跡を確認したことによって、南殿内郭のおよその規模がわかりました。

現存する土塁と調査成果などから南殿内郭の規模は、南北約 125 m、東西約 100 m と推定されます。また、2001 年の調査で見つかった土塁と今回の調査地で見つかった土塁をつないだ推定線の傾きと、光照寺の北端およびその全面道路の傾きが合致することがわかり、これまで調査などで手がかりが見つからない南殿外郭について重要な知見が得られました。



図1 山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡 位置図

山科本願寺南殿 略年表	
1478	山科本願寺造営 開始
1489	蓮如 南殿を建立
1499	蓮如 示寂
1532	本願寺焼亡
1536	泉水山光称寺 建立

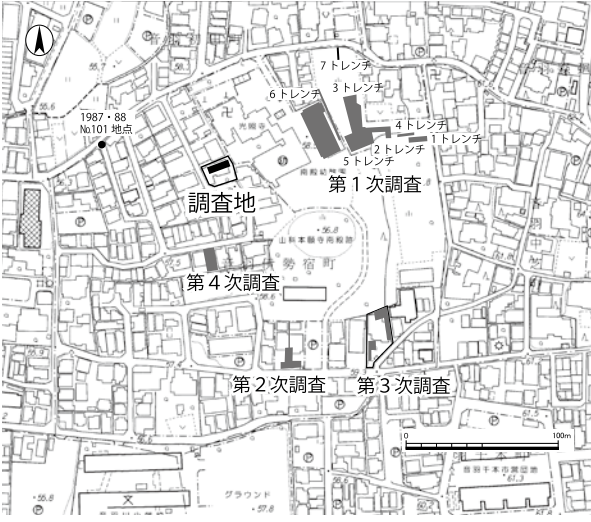


図2 これまでの調査地点

発見された遺構

南北方向の土塁および堀が東に曲がるコーナー部分を確認しました。

土塁 見つかったのは基底部と裾の張石です。積土は削られてほとんど残っていませんでした。調査区で確認できた幅は 5 m、高さは 1.18 m 残っていました。裾部は貼石で補強した後、さらに補強のため下部を土で埋めていた可能性があります。貼石の範囲は、裾から高さ 0.6 m です。裾の貼石は本願寺跡の調査では、はじめて見つかった工法です。

堀1 幅約 8.5 m、深さ 1.2 m、中心部が深くなる二段の堀になっており、人為的に埋め戻されていました。コーナー部分にあたっているため、実際の溝の幅よりも広がっていると推定されます。現存する堀や過去の調査でわかっている堀幅は約 5 m です。堀の一番深い地点から、今回残っている土塁の一番高い部分までの高低差は 1.7 m あります。

砂礫の整地層 堀をすべて埋め戻した後に、深さ 0.4 m ほど掘り下げ、砂礫をいれて整地していました。検出した幅は 3.3 m で、東側は近世の溝に切られています。

溝（堀2） 幅 2.3 m、深さ 1.1 m で黄褐色の砂で埋まっています。近世の遺物が出土することから、南殿焼亡後、光称（照）寺の時代に土塁のきわに掘り直された溝だと考えられます。

まとめ

これらの遺構を発見した結果、南殿内郭の北西端の位置を押さえることができました。また、最初の堀が埋めたてられた後に、場所を踏襲して堀が掘られたことを確認しました。こうした造り替えや砂礫の整地層から、南殿にも何度かの改修があった可能性が浮かび上がりました。

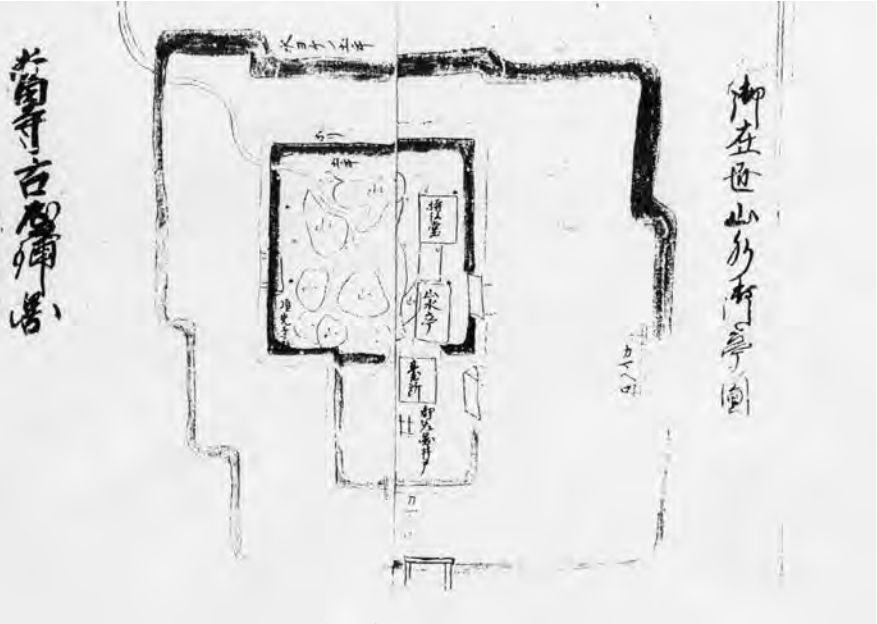


図3 光照寺に伝わる絵図

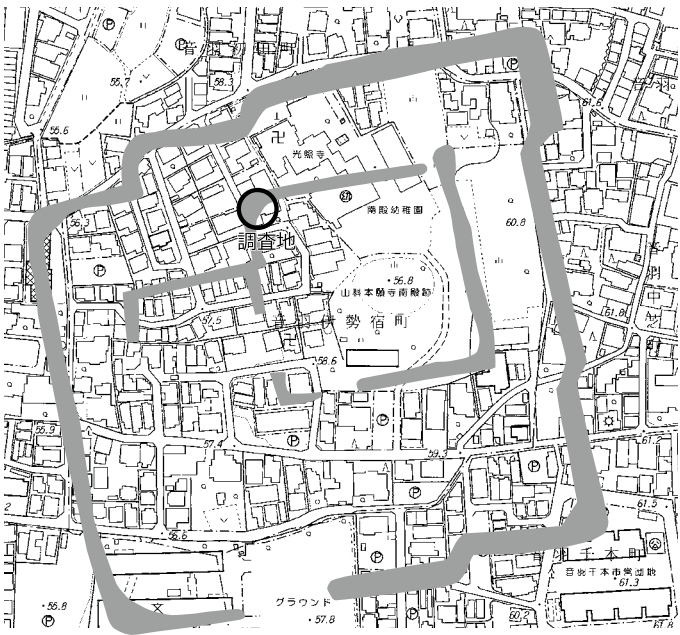


図4 南殿土塁復元図と調査位置

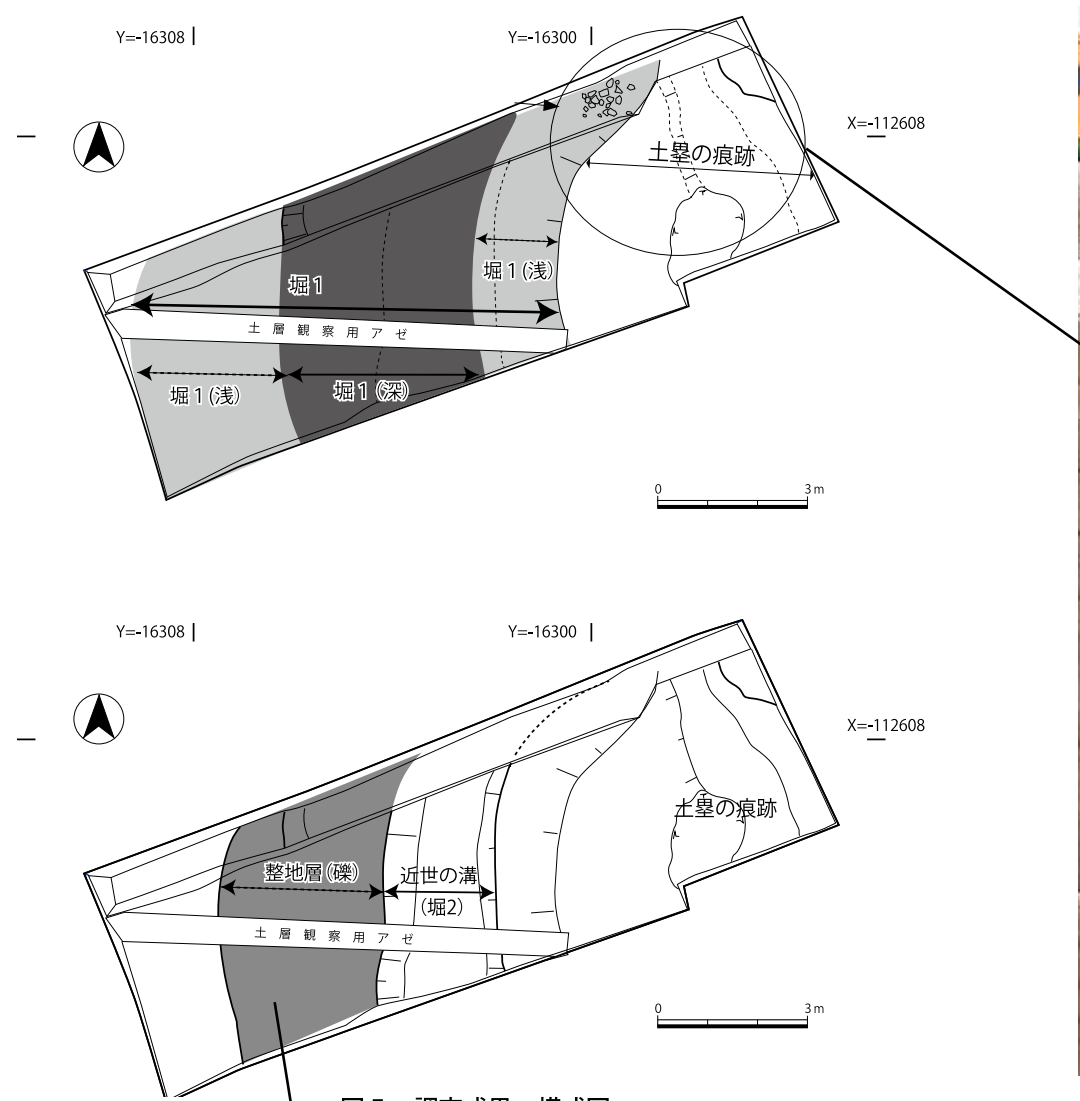


図5 調査成果 模式図



写真2 土塁の裾と貼石



写真1 近世の溝と砂礫の整地層



写真3 現存する堀と土塁（参考）



図6 これまでの土塁推定位置

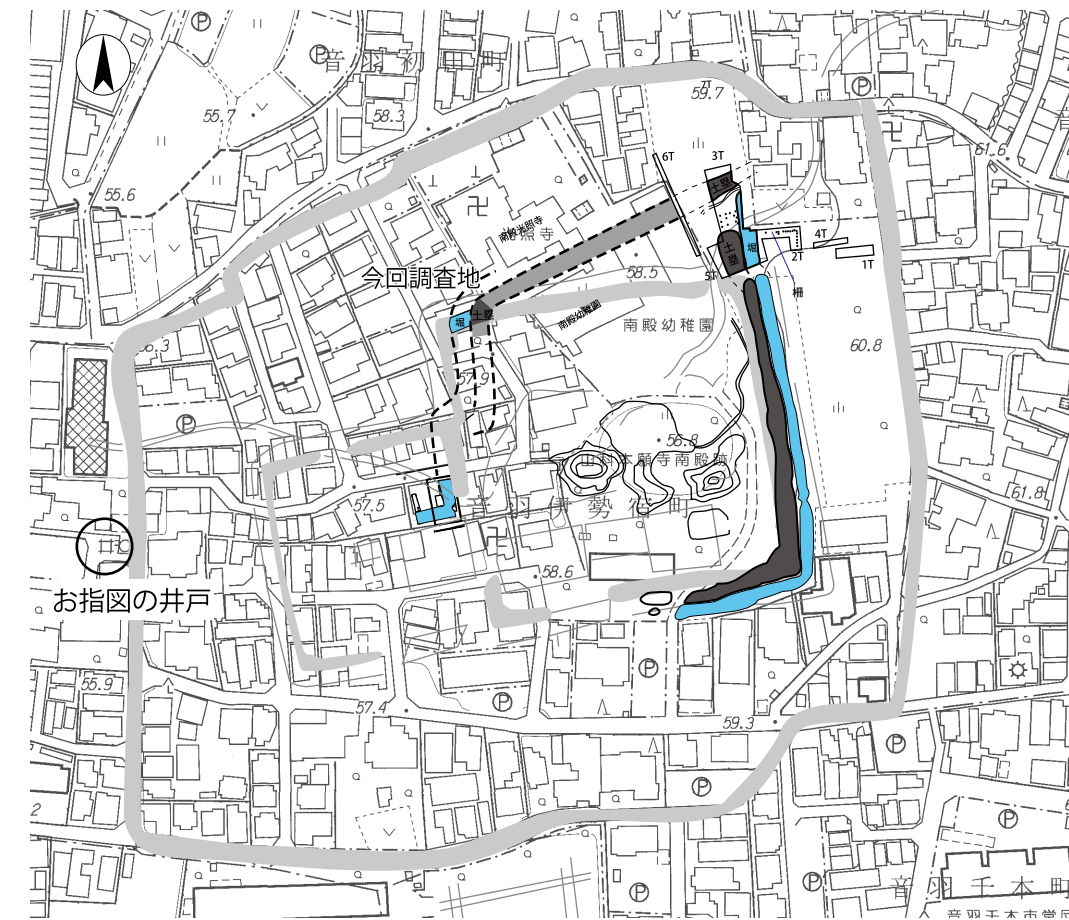


図7 今回の調査成果から検討した南殿推定範囲